

太陽光発電で地域活性化と国際貢献

電気一筋社長が創る日本経済が進む道とは

●株式会社渡辺電設／足利メガソーラー株式会社 代表取締役 渡辺好美氏



同社の太陽光発電システム

栃 木県足利市。この小さな市で、全国から注目される大規模な太陽光発電事業が展開している。市内の電気工事会社が共同で行っている同事業は、全国初の公共施設にソーラーパネルを設置した「屋根貸し」による発電事業だ。足利市の電気事業再生と技術者を育てることを目的とし、株式会社渡辺電設の渡辺社長が発起人となり始まった。現在は、足利工業大学の海外留学生へ太陽光発電技術の継承、支援を行っている。全国でいち早く太陽光発電事業に目をつけ、同社を栃木県下ナンバーワンの電設会社へと築いた渡辺社長に、事業成功の秘訣と日本経済の行く末について伺った。

ソーラー事業で地域活性化

東京から電車で1時間半、渡良瀬川が流れる栃木県足利市。近づくにつれ、車窓から見える景色には、ソーラーパネルが多く映ることに気づく。これが株式会社渡辺電設・渡辺好美社長が仕掛けた一大プロジェクト「屋根貸し太陽光発電事業」だ。

「屋根貸し」は、今では珍しくないビジネスモデルであるが、渡辺氏の場合、公立学校や公民館など足利市64箇所の公共施設の屋根を借り、賃料を払って太陽光発電システムを設置するという全国初の



モデル。官民一体となって行うこのプロジェクトは、渡辺氏が発足した足利市の電気工事会社が集まる「足利メガソーラー株式会社」が行っている。

初は文部省から文句が出ました。補助金を受けている建物を使う上にレンタル料で儲けるとは何事か」と当時を振り返る。文部省を半年かけて説得し、ようやくスタートという時、今度は市の建設課からストップがかかった。不安要素をひとつずつ解決し、スタートできたのは1年後であったという。

2016年8月には、足利市に隣接する佐野市「道の駅どまんかたぬま」へ大型駐車スペースを施工、屋根には太陽光発電システムを設置した。平常時には道の駅の売電事業として行われているが、自然災害などの非常時には避

難所としての役割も持つ。佐野市の第三セクターである同道の駅の施工であったが、市長の全面協力もあったという。これら地域活性化にもつながる太陽光発電事業。ユニークな発想で成功した事業であったが、渡辺氏にとって、それまでのビジネスに見切りをつけてからのスタートであった。

寄り道しないで電気工事ひとすじ

渡辺電設は、1964年4月に同氏が「渡辺電気工事店」として創立した。1975年に株式会社渡辺電設として設立し、現在に至る。従業員数15名で年間の売り上げは30億円を超える。

「中学2年の時から、この道に入る決めていました」。出身は宇都宮。農業が主な土地で兄弟が多く、裕福とは言えない家で育ったという。「雷が多い地域で、停電になると電気屋が来て直してくれたのを見ていたのです。良い仕事だなと思ひ、電気工事屋になると決めました」。技術を身につ

け早く親を安心させたい、社会に役に立つ仕事がしたいとの想いで、中学を卒業すると宇都宮工業高校電気科の定時制へ通い、住み込みで電気工事会社へ入社した。4年間みっちり勉強と修行をし、20歳のときに独立。最初は必死に仕事を請けていたが、だんだんと建設業と電設業の関係に不満が出てきたという。「建設会社で元請けで、我々は下請け。このままではいつまで経ってもうだつが上がらない。売り上げが3分の1になってもいいから元請けでしか仕事をしないことに決めました」。

今までの元請け会社と一切縁を切って、一からの出直し。32歳の時であった。「今でいう提案営業を、一軒一軒まわって行いました」。同氏の人脈の作り方は、地方ならではの特徴がある。来る人には全員丁寧に対応すること。そして地域の住民とは親戚同様の付き合いをすることがモットーだ。宇都宮から足利に移ってきてから、人との付き合いを第一に優先し、そのお客様が持つ問題を誠実に解決してきた。「自分を受け入れてくれ

